
ブレイヴ・ダーク

和泉紀伊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブレイヴ・ダーク

【Nコード】

N7673P

【作者名】

和泉紀伊

【あらすじ】

街角の、似顔絵の中で三年振りに見かけた片脚の彼女を追って伊藤は夜の街をひた走る。三分間、善行をする青年との出逢い、ラジオ局でパーソナリティを勤める幼なじみとの通話、ラベンダーの咲く家を探す祖父の回想などを経て伊藤は彼女に追いつけるのか。クリスマスの部内誌のテーマ『携帯電話』『コート』『時計』『夜』に沿って書きました

ブレイヴ・ダーク？（前書き）

クリスマスに出される部内誌で、共通のテーマ『携帯電話』『コート』『時計』『夜』を使って小説を書く、ということで書かれたのがこの『ブレイヴ・ダーク』です。読んでいただけたら、倅い

ブレイヴ・ダーク？

見間違う筈がない。レジャーシートに並べられた似顔絵のサンプルを前に伊藤は足を止める。それは確かに彼女の肖像だった。

「この絵の女性を描いたのはいつですか？」

はやる気持ちを抑えてスケッチブックに鉛筆を走らせる男性に尋ねる。彼はついさっきだと答えた。きっとまだ近くにいます。伊藤の胸は緊張に震えた。

「変わった人だったなあ。似顔絵を描き終わったら次に全身を描いて欲しいって。ほら、そこに立ってかけてあるのがそう」

立ち姿で描かれた絵に目を丸くした。けれど冷静に目に焼き付ける。どこへ行ったかという質問に男性は少々いぶかしんでいたが教えてくれた。

礼を言ってコートをひるがえし、駅のロータリーの階段を降りた。今にも闇に溶けてしまいそうな彼女の姿を懸命に繋ぎ止めた。見えない背中を追う足取りは雑踏の中で次第に速くなっていった。

沙希は自分を許してくれないだろう。それでも千の夜を越えて君に逢いたい。伊藤は強く願う。

店内に携帯電話の着信音が鳴り響く。

客の姿はない。カウンターを出て商品棚を見て回る。誰の悪戯か、携帯電話は青年向けの雑誌と一緒に陳列されていた。開くとディスプレイには『倉本へ自宅』の文字。落とし主だろうと伊藤は通話ボタンを押した。案の定、男性が携帯電話を落としたことを落ち着きを払った声で告げた。

受け取りに来た壮年の男性に携帯電話を手渡す際にポケットから根付けを取り出して見せた。

「この携帯電話に付いていたものじゃありませんか」

「確かに私のものだが、どうして？」

「ストラップをかけるところが欠けていて埃もたまっていなかったから、一応、店内を探して見つけたんです」

すると男性は少し考えてから、君、家庭教師をしてみないかいと言った。意外な言葉に伊藤は戸惑う。

「家庭教師と言っても難しいことは求めてはいない。娘の身の回りの世話をしてやって欲しいんだ」

「なら女性の方が良いのでは？」

「わけあって男手が必要なんだよ」

躊躇いがちに伊藤は一度会ってから考えると言った。

伊藤の通っていた大学の近くに男性の家はあった。以前は通るたびにその家からピアノの音が聞こえてきたことを思い出す。家そのものがオルゴールみたいだと思っていたけれど、最近はふたを閉じたかのように静かだった。

リビングのソファに倉本沙希は腰掛けている。左脚が彼女からは欠けていた。

ブレイヴ・ダーク？

バイクの停めてある後ろの壁には『No. 8』と『Do You Have Bravery?』と書かれたスプレーアートがあった。その前で青年がギターを爪弾いている。胸元で鳥を象ったネックレスが鈍く光っていた。

沙希のことを聞いたが見なかったと言う。伊藤は視線を落とすが、すぐに顔を上げて礼を言い「上手だね。その曲、ジョン・デンバーの『故郷に帰りたい』だろ。俺も好きなんだ」と付け加えて踵を返した。

立ち去ろうとする伊藤を青年は引き留める。彼は千切ったメモに電話番号を書いて、力になれることがあったら呼んでくれよと言って手渡した。初対面の人間にそんな言葉をかけてくれる人間がいると思わなかったから余計なことを勘ぐってしまった。それを察した青年はシニカルに笑って言った。「三分間だけなんだけどな」

「それは使いどころに一时间くらい悩むかもしれないな」

勇気は持ったか？ 英文を訳してから伊藤は一步踏み出す。それが勇気と呼べるものかわからないが、自分の気持ちだけははっきりしている。

でも、彼女はどこへ行こうとしているのだろう。伊藤には見当も付かない。

伊藤の仕事はもっぱら、沙希を二階の自室まで連れて行く補助だった。軽いとは言え、階段をのぼる時など必要以上に慎重にならざるを得ない。

最初は私物を一階に降ろせば良いのと思った。けれどドアを開けてピアノが目に入り、きっとこれが彼女をここに帰って来る理由なのだ。伊藤は感じ取る。オルゴールは箱の中に音楽を閉じ込めてい

るんだ。沙希は彼の前では一度もピアノを弾かなかった。彼女がやることと言えばベッドでラジオから流れるクラシックの放送に耳を傾けるばかりで、伊藤とはほとんど口を聞かない。

一週間ほどした夜、ラジオのチューニングをしていると聞き慣れない音が流れてきて彼女は手を止めた。鯨の鳴き声らしい。高低差がある伸びやかな音の波に何故だか心を打たれた。伊藤は思わず、「この夜は誰かにとってかけがえない夜なのかも知れない」と言っ

た。

「例えば？」

え？ と聞き返すと沙希は多少いらついた様子で頬杖をつきながら伊藤を見た。今までに無いことで言葉が詰まる。彼女は窓枠を細かい指でコツコツと叩いた。

「だからこういう風になって聞いているの」

しばらく顎を撫でながら考える。「そうだな」

「例えばこの世界の片隅で誰かが夜明けを待ってる。独りぼっちの夜だ。寂しさを紛らわせたくて何気なく付けたラジオから聞こえてきた鯨の鳴き声。彼は自分が育った故郷の潮騒を思い出す。久しく連絡を取り合っていない友達が脳裏に浮かんで、勇気を出して電話をすると友達が言うんだ。『俺もちょうど話したかったところなんだ』って」

ばかみたい。沙希は右脚を折り曲げて抱える。本当にと伊藤は自嘲した。

ブレイヴ・ダーク？

幼い頃に一時期、祖父と一緒に暮らすことになった。初めて逢うということもあって伊藤は緊張し汗ばむ手を幾度となくズボンの裾で拭った。祖父は伊藤を見ると目尻に皺をよせて笑い、頭を撫でる。祖父はいろいろなことを教えたし、伊藤も知りたがった。

「どうしておじいさんの腰はそんなに曲がっているの？」
すると祖父は伊藤の耳元で答えた。

「隼人くんと同じ目の高さで話すためだよ。そうすると君の声がちゃんと聞こえるからね」

なるほどと思った。父と母の耳はずっと高いところにある。だから二人が自分の話を聞いてくれているかわからなくて、時々、寂しくなることがある。けれど祖父の耳は伊藤のすぐそばにあった。

伊藤はもっと早く歩きたいのに、気付くとずっと後ろに祖父がいることがあった。その度に伊藤は立ち止まって祖父を待つ。なんだから、じれったかった。

そこで伊藤はようやく追いついた祖父に尋ねた

「どうしておじいさんは、そんなにゆっくりと歩くの？」

「ラベンダーが咲いている家を探しているからだよ」

伊藤は首をかしげる。もっと早く歩いてくれたら、待たずに済むのに。幼い彼には疑問でしかなかった。

「昔の恋人がラベンダーが好きでよく植えていたから、もしかしたらそれを目印にまた逢えるかも知れない。だから私は見落としてしまわないように、ゆっくりと歩きながら探しているんだ」

聴き終えた伊藤は「ぼくも一緒にさがしてあげる」と言った。祖父は嬉しそうにお礼を言い、ゆっくりと歩き出す。伊藤も老人に合わせて歩き出した。

陽がくれるまでに色々な所を二人で回った。道路の上を走る、駅のロータリーを抜け、噴水のある公園やイチヨウの並ぶ通りを過ぎ

る。針が六時を指し示し、大時計の両脇で音楽に合わせて踊る人形の仕掛けを眺めた。

けれどラベンダーを植えた家は見あたらなかった。

祖父が亡くなった時、天国で恋人に見つけてもらえるようにとラベンダーの花を棺に添える。

アルバムを見せてもらえた。まだ乳飲み子だった頃の父親を抱えた女性の足元にラベンダーの入った鞆が置いてある。

電話をかけるとすぐに繋がった。貝崎千晶の耳に受話器越しに伊藤の荒い息づかいが伝わって来た。

収録はどうしたの？ と尋ねられて千晶は言った。

「これから。本番前なの。隼人は何をしてるの？」

『ストーリーキング、かな』

「洒落にならないよ」

伊藤は三年ぶりに沙希に会えるかも知れないんだと声を弾ませる。千晶は眉をひそめた。

「友人としての忠告。会わない方が良いと私は思う」

『どうして？』

「もう三年も経つんだよ。いきなり隼人が現れたら彼女を混乱させるだけだし、もしかしたら両方共傷付くだけかも知れないじゃない」
『例え、そうだとしても俺はどうしても伝えたいことがあるんだ。』

「やるしかないなら、やるっきゃない」はお前の口癖だろ』

違うっつうの。千晶は伊藤に聞こえないよう、ぼそりと呟いた。

最初にその言葉を言ったのは伊藤だった。高校を出てすぐにラジオ局のパーソナリティに勤めたいと言った千晶に両親はひどく反対した。それでも幼なじみの伊藤だけは彼女を応援してくれた。

解り合えるまで何度でも話そう。やるしかないならやるっきゃないって。その言葉に千晶は励まされた。いつかそんな風に誰かの背中を押せる人間になろうと決意した。

『そうだ。昨日はありがとうな。俺のリクエストを取り上げてくれて。エリック・クラブトンの「チェンジ・ザ・ワールド」が流れて来た時は吃驚した』

「少し早い誕生日プレゼント代わりよ。特別なんだから。また何かあったら言って。気が向いたら流してあげる。そうね、お礼はシュークリームで良いわ」

『職権乱用じゃないか』

伊藤の苦笑が耳をくすぐる。

「久遠ディレクターも三年前に似たようなことをしたから気にする必要無いわよ」

じゃあね。電話を切ると千晶はスタッフにひとつ頼みごとをした。それは伊藤がいる街から送られてきたメールを全部、自分に回すことだった。

ブレイヴ・ダーク？

沙希は度々、無いはずの左脚の痛みを訴えた。幻肢痛と呼ばれる症状だと後で知った。

「どこかに左脚があるから探して欲しいの」

わけもわからず言われるままに伊藤は沙希の体をさする。余程痛いのか熱っぽい素肌は汗で湿っていた。女性の肌に触れることに抵抗を感じつつ右足の裏、内腿、太腿と少しずつ位置をずらしながらさすっていく。腰から上をさすのに沙希が服をたくしあげる。肩甲骨の下に手が触れた時、あったと彼女は言った。「そのまま続けて」

「どうして、無い脚が痛むなんてことが起こるんだい？」

「頭の中には自分の全身の地図があるの。あなただって鏡が無くても自分の鼻に触れられるでしょ？　それが体の一部が損なわれたにも関わらず更新されないと事故に遭った瞬間の左脚の情報をいつまでも再生し続けてしまうのよ」

担当医の受け売りだけどねと沙希。

「つまりC Dプレイヤーが、C Dに付いた傷の寸前の音をいつまでも伸ばしているようなものなんだ」

「言い得て妙ね。ありがとう、だいぶ楽になったわ」

「今まであったものが無くなっても『失くした』と理解するのには時間を有するんだな。俺は祖父が亡くなった時がそうだった。泣けるようになったのは、しばらくしてだ」

そう言えばと伊藤は祖父とラベンダーの咲く家を探して街中を歩いたことを話した。話してから過ちに気付く。

もう沙希は自分の脚で自由に歩くことは出来ないのだ。

「気にすることはないわ。でも時々挫折そうになるのも事実ね。転ぶ脚なんて無いのに」

「笑えないよ」

千晶は携帯電話を通話状態にしたまま読み上げる。それは伊藤に繋がっていた。

「ラジオネーム、花花さんから。『こんばんは』こんばんはー。『今日、ほんのり心が温まった出来事』がテーマだったのでメールしました。さっきイチヨウ並木の交差点で男の人が赤信号なのに横断歩道の途中で突っ立っているからどうしたのかなって思いました。そしたら反対側から来た女の人がすれ違い際に彼に会釈したんです。」

女の方は左脚が悪いようで、覚束ない足取りでゆっくりと歩いているうちに信号が変わってしまったらしく、男の方は彼女が渡りきるまで自動車の流れを止めてあげていたんだと気付きました。女の方はイヤホンをしていたからわからなかったかも知れないけど、勿論クラクションの大ブーイングでした（笑）

周りに迷惑をかけるやり方はどうかと思うけど、自分が非難の的になっても誰かに何かしてあげようとする、そういう優しさっていいなと。私が見た、ほんのり心が温まった出来事でした』。ありがとうございます。いやあ良いですね。他の誰にどう思われようが知ったこっちゃないって感じで」

コメントを述べている間に彼女は思う。自分は伊藤の力になれただろうか。やるしかないなら、やるっきゃないんだから携帯電話の電波が届くうちは、会いに行つてあげなさいと密かにメールを送つて千晶は次のメールを読み上げる。

ブレイヴ・ダーク？

音楽の話をよくした。伊藤は洋楽、沙希はクラシックを互いに薦め合う。彼女はその時にヘルマン・フォン・ギルムが作詞した『夜』の日本語訳を教えてくれた。気に入ったので伊藤の携帯電話のメモには今も残っている。何度も聞き返して怒らせたっけと思い出して伊藤は苦笑する。

森の中から夜がやって来た。木々の間からこっそり抜けてあたりの様子をうかがっている。

さあ気を付けるんだ。この世のすべての光を、すべての花々を、すべての色を夜は消し去り隠してしまう。

畑の麦束も夜は好ましいものをすべて奪ってしまう。

川の流れから銀色の光を、大聖堂の銅の屋根の金色の輝きを、茂みもすべて夜に奪われた。しっかりと寄せ合おう、心と心を。

ああ夜を僕は恐れる。

それが僕から君も奪いはしないかと。

伊藤は夜が嫌いではない。だから思う。ここで歌われている夜は大切なものを奪い去る、抗えない大きな流れのことなのだ。それは時間であったり、死そのものなのかも知れない。けれど、どうしようもないと膝を着くわけにもいかず怯えながらも一步一步進んで行くしかないのだ。

どこに行けば彼女に会えるかもわからず手探りで夜を歩く。もしかしたら気付かずに沙希からずっと離れて行っているのではないかという不安を抱えていた。けれど千晶が教えてくれた。

案の定、伊藤は迷走していたようだ。

この街の夜は、優しい。千晶との通話を切り、メモを見ながら別の番号にかけ直す。知らない電話番号からかかって来たのを警戒しているのか、なかなか出ない。それでも信じて呼び続けるしかなかった。

彼が出る。伊藤はさっき番号を受け取った者だと伝え、一拍置いてから頼みがあると言った。

『すげえ、三時間も悩んだのかよ』

「ちょっとバイクで迎えに来て欲しい。乗せて行ってもらいたいところがあるんだ。三分じゃ、片付けないかもしれないけど」

『大丈夫。俺たちには延長戦がある』

頼もしいかぎりだ。伊藤は一度、立ち止まる。空を見上げると、夜をそだけ切り抜いたような半月が街を照らしていた。

彼女が義足を手に入れ、伊藤の仕事は歩行訓練の補助になった。しばらくしてから彼がいない時に沙希が一人で階段を登ろうとして落ち、捻挫した。

そして伊藤はわけもわからないままクビになった。何故なのか、自分の何が行けなかったのか。理由を聞いたけれど教えてはもらえない。

彼女がいない日々は伊藤の脳裏で痛みを訴え続ける。

マイクの電源が入っていることを確かめてから千晶はエリック・クラプトンの『チェンジ・ザ・ワールド』をかけるよう言うてから、あえて話し始めた。スタッフは驚きつつ見守る。

「空に消えてしまう言葉があるかも知れない。伝わらない想いがあるかも知れない。届かない手紙があるかも知れない。冷めてしまう温もりがあるかも知れない。それでも人は諦められない。何故だか今日も寂しい夜だから。ねえ、聞こえてる。もし聞こえているなら

一度立ち止まってあげてよ。夜に踏み出すのはきつと怖いことだから。きつと、勇気がいることだから」

ブレイヴ・ダーク？

渋滞に引っかかり、伊藤はバイクを降りた。礼を言い、同時に残されてしまう彼に詫びた。青年は、早く行けと追い払う仕草をする。ありがとう。もう一度言ってから歩道に入り、走り出す。

大時計が十一時を指し示す。沙希の名前を呼んでも鐘の音と、オルゴールがかき消してしまう。煌びやかな光に包まれて、伊藤をあざけるように踊る人形たち。

足元の、一本のラベンダーに気付く。軽快に歩く人々に踏みつけられて萎れている。

先にも一本あった。

たどって行くに連れて、花は少しずつまだ生氣のあるものになっていった。花は街路樹の下に続いていた。幹に寄りかかって両脚を揃えて立つ彼女は一輪だけになってしまったラベンダーを持て余している。

大時計の音が途絶え、伊藤は彼女の名前を呼んだ。顔をあげた沙希がイヤホンを外し、唇を尖らせて言う。

「この夜は誰かにとってかけがえのない夜なのかも知れない、だって」

高鳴る胸とくしゃくしゃになりそうな顔を必死でこらえて、ちょうど君と話したかったところなんだ。伊藤はつぶやき、歩み寄る。

今どこへ向かっているのか、本当にわからない。どちらが舵を握っているわけでもなく、淡々と進む。

「あなたのおじいさんの話を覚えてる？ 私思うの。おじいさんはきつと、あなたと一緒に歩きたくて嘘を吐いたんだって。本当はとつくに恋人と再会していたのよ」

「少し、早い？」

「ちょうどいい」

「練習に付き合っただけであげられなくてごめん」

良いのよ。父さんがあなたをやめさせたんだからと言い沙希は続ける。伊藤は黙って耳を傾けていた。

「三年前に階段から落ちた時、父さんに言ったの。あなたと一緒に歩きたいって。焦る気持ちはわかるけれど、そこで無茶をして、また怪我をしたら大変だって。私が無理をしようと思わず少しづつ義足に慣れていくようにとあなたはやめさせらるし、おかげでやる気が起きなくて全然上達しなかったわ」

羽織ったストールが不器用に揺れる。沙希の歩き方はまだぎこちない。彼女の荷物を持っても尚、遅い。それがよくここまで来たものだ。伊藤は関心してしまう。沙希が通っていたのは祖父と伊藤が昔歩いた道だからこそよくわかる。彼女は頭の中にある地図をたどっていたのだ。

「よく気付いたわね」

「気付けなかったら、いつまでも追い付けなかったよ」

会話が途切れる。話したいことは沢山あった筈なのに今は思うように言葉が出ない。

「ラジオから『チェンジ・ザ・ワールド』が流れて来て、あなたのことを思い出したの。それであなたから聞いた道を歩いてみようって。そしたら今日も同じ曲がかかって、『足を一度止めて欲しい』だなんてパーソナリティが言うから驚いたわ」

千晶には本当に頭が上がらない。伊藤はおいしいシュークリームの店を後で探そうと思った。彼女の好みはわかっている。

沙希がつまずいてバランスを崩し左側に傾く。咄嗟に伊藤は彼女の体を支えた。三年ぶりだけれど、体は覚えていたようだ。

「久しぶりに転んだ」

「転んだ奴が嬉しそうな顔するなよ」

確かに夜は深まっているのに人通りは一向に途絶えない。自分たちが流れに身を委ねているのか、それとも抗っているのか、そもそ

もどこへ向かっているのかもわからない。沙希もわかっていないのではないだろうか。

心に寂しさが根付かないように伊藤は言う。

「君のピアノが聴きたい」

「そう。考えておくわ」

遠くで零時を告げる鐘が鳴っているのが聞こえたような気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7673p/>

ブレイヴ・ダーク

2011年7月4日03時38分発行